

白秋アートギャラリー(7)

「落葉松」と父

山田 恵里

一
からまつの林を過ぎて、
からまつをしみじみと見き。
からまつはさびしかりけり。
たびゆくはさびしかりけり。

二
からまつの林を出でて、
からまつの林に入りぬ。
からまつの林に入りて、
また細く道は続けり。

白秋のよく知られた詩「落葉松」の「一」と「二」から引いた(「落葉松」は「八」まである)。亡き父は、晩酌に酔うと「落葉松」を口ずさんだ。幼い私は、お酒を呑む時の決まり文句なのだとして解釈していた。

少し成長すると、進学を断念せざるを得なかったり、物

書きになる夢を果たせなかったりした人生の嘆息を酔いに任せて吐き出しているのだと解釈するようになった。無口な父は、人生を諦めて読書とお酒だけを楽しみにしているように思えた。ひたすら繰り返される第一・二連に、薄暗い落葉松林が延々と続く陰鬱なイメージが出来上がった。ところが長じて全編を読むと、イメージの違いに驚かさされた。落葉松林は、寂しいだけではなかったのだ。「われのみか、ひともかよふ」道があり、主体は「からまつとささやき」を交わす。確かに人生の哀感を歌っているが、決して孤独ではない。五七調の心地よいリズムに流れていく詩情は落葉松の細い葉を渡る風のように、凜として気品のある生き方を感じさせる。

八
世の中よ、あはれなりけり。
常なけどうれしかりけり。
山川に山がはの音、
からまつにからまつのかぜ。

人生は思うに任せないものだが、「あはれ」で「うれし」きものだ、と父が感じてくれていたと信じた。妻や子を持ったことが、それに一役買っていることを願うばかりだ。酔った父が「さびしかりけり」と唱えるのを嫌っていた母に、第八連を読ませてあげたい。